

# メソアメリカ文明像再考への試論 —歴史観・混血・環境—

井上 幸孝

## はじめに

2010年、世界的不況の波をよそにメキシコ合衆国はお祭りムードにつつまれている。国内では独立200周年と革命100周年を記念する文化イベントが次々と開催され、歴史関係の書籍の出版も活発になされている<sup>1</sup>。加えて、日本とのかかわりでは、2009～10年にかけて日墨修交400周年を迎え、在日メキシコ大使館を中心として講演会や展覧会など様々な催しが行なわれている<sup>2</sup>。

今から20年近く前、クリストバル・コロン（英語名クリストファー・コロンブス）の航海から500年を迎えた1992年にもお祭りムードと呼びうるものが存在した。ラテンアメリカ諸国の側からは、「発見」という語の使用に象徴される西欧中心史観への反論がなされたものの、かつての植民地宗主国スペインではお祭り気分が大勢を占めた<sup>3</sup>。スペイン国内は夏季オリンピック大会（バルセロナ五輪）や大規模な万国博覧会（セビーリャ万博）の開催で大いに盛り上がった。日本もコロスが1492年の航海を行なったサンタ・マリア号の復元航海に参加するなど、どちらかと言えば無批判にヨーロッパ中心主義的な見方を受け入れその祝賀ムードに便乗した感が強かった<sup>4</sup>。

今回のメキシコの「お祭り」は、その繰り返しになるのだろうか。ささやかながらメキシコ史の一学徒として、筆者はこの機会を「お祭り」のまま終わらせてはならないと強く感じている。政治主導で推進される祝賀ムードの中で、アカデミズムが寄与できることは必ずしも多くないかもしれない。しかし、歴史学やその近接諸分野に携わる研究者が、メキシコやラテンアメリカの歴史に関するこれまでの知見をただ無批判に再生産し、お祭り気分便乗することだけは避けなければならない。むしろ、これまで



図1：独立200周年をカウントダウンする時計。（筆者撮影）

自明と考えられてきた歴史観や歴史像の前提となっている諸概念をあらためて見つめなおす契機とすることは少なくとも可能と考える。

本稿の目的は、メソアメリカ<sup>5</sup>の特徴とは何かという議論をあらためて行なう必要性を提起することにある。この目的のために、メキシコ史における「先住民（インディオ）」という捉え方の問題を最初に論じる。その上で、メキシコから中米に広がるメソアメリカ先住民文化を見る際にこれまで希薄であった二つの観点—混血と環境—を提示し、従来の歴史的制約に捉われない新たなメソアメリカ文明像を模索していくための試論としたい。

## 1. 祭典と歴史観

2010年3月、メキシコ合衆国の首都メキシコ市の中央広場であるソカロ（正式名称：憲法広場）には、普段のこの場所の景観には不釣合いな臨時建造物が配置されていた。その建物とは、2ヶ月間の予定で開催される「メヒコ・エン・トゥス・センチードス（México en tus sentidos）」展の会場で、有名建築家がデザインした特設展示館であった。そこで開催されていたのは、メキシコ人写真家の作品が展示された入場無料の展覧会である。ビデオ上映やグッズ販売なども行なわれ、筆者が見学した日も平日であったにもかかわらず、開場前から見学者が列を成すほどの賑わいを見せていた。国内の大手メーカーが多数スポンサーとなり、メキシコ市当局（GDF）の主導で、独立200周年と革命100周年を大々的に祝うイベントの一環として、人々の集う首都の最中心部で開催されているものであった。

「メヒコ・エン・トゥス・センチードス」という展覧会の名称は、直訳すれば、「君の感覚



図2： 「メヒコ・エン・トゥス・センチードス」展のためにソカロ（憲法広場）に設置された特設会場。（筆者撮影）

の中のメキシコ」、すなわちメキシコ国民一人一人が感じるメキシコのイメージを主題としたものである。入口を入ると、メキシコ国民の個人の表情を撮ったいくつもの写真が目に飛び込んでくる。その後は、自然、建築、宗教、食文化などいくつものテーマ別に「メキシコらしさ」を浮き彫りにする写真が展示されていた。

実際に展覧会を見学して、最も興味深く思われたのは、上記の各テーマ間での被写体の違いであった。例えば、「職業 (oficios)」と題された一角の写真に登場する人々は、都会的で、先住民的要素を含む写真はほとんど見当たらない。それに対し、「子供たち (niños)」と題された一角を占める写真には、先住民衣装など土着性や非近代性を強調する要素が多く見られ、「職業」コーナーとの対比を成していた。



図3： 同会場の出口脇には、「メキシコは私たちの団結を必要としている (México necesita que nos unamos)」と記されていた。(筆者撮影)

つまるところ、この展覧会は、メキシコ国家もしくはメキシコ国民という一体性を提示しようとしているように筆者には感じられた。しかしながら、その「一体性」を構成する諸要素は、都合よい部分の継ぎはぎでしかない。すなわち、そこで演出される「メキシコらしさ」とは、メキシコに存在するものを二つに大別し、場面に応じて必要な要素を取り出してきたというものであった。

その二つとは、言うまでもなく、西洋由来の要素と先住民由来の要素であり、この二分法に基づく両者の「混じり合い」が現代メキシコを形成しているという旧態依然の歴史観に基づいたものである。この発想に立つ限り、先住民的要素の中に多様性は認められにくく、先住民性は西洋性と一律に対をなすものとして扱われる。近年、とりわけ現代社会を扱った研究において、多文化性 (multiculturalidad または pluriculturalidad) や間文化性 (interculturalidad) という観点が唱えられてきた。にもかかわらず、今回のごとく国家意識を発揚するイベントでは、「混血の神話」という発想が根強く姿を現す。こうした歴史像はこれらの記念イベントを通して再生産され、いま一度、人々の心に深く刻み込まれようとしている。

「メヒコ・エン・トゥス・センチードス」展の例に見られるように、国民一般を対象とした、とりわけ今回の「お祭り」のような場面では、20世紀の遺産と化したはずの国民国家メキシコの文化観が再生産され続けている。極論を言えば、1994年の武装蜂起を嚆矢としてメキシコ社会や国際社会にこの国が歴史的に内包している深刻な先住民問題を提起したはずのサパティスタ国民解放軍 (EZLN) の存在も、ここでは等閑視されてしまう。だが、我々は現代メ

キシコに今も存在する先住民性を長いタイムスパンから見直す必要に迫られている。現代国家の枠組やそれに関連してここ 200 年にわたってつくり上げられてきた公定史的言説とは切り離れた形で、先住民性とは何なのかを再考しなければならない。

## 2. 「インディオ」の多様性

まずは「先住民」もしくは「インディオ」という呼称について考えておきたい。「先住民性」、「インディオ的」などという表現をふだん我々は意識せずに使用しがちであるが、その内実を問い直してみる必要がある。なぜなら、先住民もしくはインディオという表現は、歴史的に見れば、ある時点で外部の者によって与えられた呼称であり、そう呼ぶことによって暗黙のうちには彼らの間に一体性があるかのような印象を抱かせるものだからである。

一体性をもった先住民という先入観の典型的事例として、メシコ征服戦争<sup>6</sup>が挙げられる。かつて征服の歴史的経緯の解明は、ほぼ全面的にスペイン側の史料に基づいてなされていた。というのも、20 世紀初頭までに歴史学で常識となっていた実証的研究のための史料批判の方法に従えば、先住民側の史料は歴史学研究には不適格で、ヨーロッパ人の残した史料の方が史実に忠実と考えられたからであった。

征服戦争の見方に大きな変化が訪れたのは、20 世紀半ばのことであった。メキシコの歴史研究者レオン＝ポルティージャが「敗者の視点」を提唱し、先住民側の史料から征服への眼差しを再検討することを提唱した（レオン＝ポルティージャ 1994）。この視点は、大きな反響を呼び、やがて「1992 年」をめぐる議論や様々な先住民運動の高まりもあって、現在では、当然のように受け入れられている。すなわち、「スペイン人（あるいはヨーロッパ人）の視点」に対置される「先住民（インディオ）の視点」が存在するという考え方がここ数十年、広く受け入れられてきた<sup>7</sup>。

しかし、この見方だけに依拠すれば、大きな誤解を生じかねない。その最大の理由は、「インディオの視点」なるものを「スペイン人の視点」の対立項として設けることで、その「インディオ」があたかも一体性を持った集団であるかのような錯覚を与えてしまうことである。

インディオという概念は、ボンフィル・バタージャの言葉を借りれば、「植民地化された者」と同義である（Bonfil Batalla 1972: 110-117）。換言すれば、ヨーロッパとの間の支配／被支配という関係性において初めて意味を成す。しかし、その「インディオ」という集団にまとまった実態はなく、そもそもは「インディアスの住民」というきわめて漠然とした地理的範囲の人々を指す呼称に過ぎなかった。実際、当時の日本人や中国大陸の人々も、インカ人やアステカ人も、押し並べてインディオの範疇に含まれた。別の機会に論じたように、メキシコの歴史家オ

ゴルマンが「アメリカ」という概念をヨーロッパ人の発明と呼んだのと同様に、「インディオ」もまた西欧人の発明品であった（オゴルマン 1999; 井上 2008）。

それゆえ、歴史上の様々な場面において、「インディオ」が一丸となることはなかった。それどころか、征服以前の諸集団は自己と他者を様々な形で区別し、差別化していた（Escalante Gonzalbo 2002: 58-61）。その典型的な例の一つが、スペイン人コンキスタドール、エルナン・コルテスによるメシコ征服戦争の際にメシコ中央部の先住民諸集団のとった行動である。

スペイン人の側からすれば、メシコ征服戦争は、コルテス率いるスペイン人一行がいわゆるインディオ同盟者たち<sup>8</sup>を味方につけ、「アステカ王国」なる政体を滅亡させたという戦争であった。しかし、その「アステカ王国」とは、何ら一体性を持つものではなく、数多くのアルテペトル<sup>9</sup>の緩やかな連合体に過ぎなかった。しかも、コルテス到来時には、その中心を成す三都市同盟の中でテノチティトランが圧倒的な優位を確立しており、それに対して不満を抱える先住民集団や諸都市が多く存在していた。

その結果、スペイン軍に加勢した多くの「インディオ同盟者」の行動パターンは、基本的にヨーロッパ人とは無関係の、彼ら独自の政治的思考に基づいたものであった。強大な権力を持つに至ったテノチティトランを倒せば、その後にはメシコ盆地で数世紀来続いてきた三都市による支配体制（エシュカン・トラトロヤン）に基づく新たな政治秩序が確立できると彼らは考えていた。

実際、スペイン人が到来するおよそ1世紀前の1420年代末にも、同様の政変があった。当時の三都市同盟はクルワカン、テツココ、アスカポツァルコという3つのアルテペトルから成っていた。だが、アスカポツァルコの王マシュトラはテツココやテノチティトランの王を暗殺し、メシコ盆地部での覇権を築き上げようとした。このアスカポツァルコの権勢を前に不満を募らせた諸集団をまとめ上げたのは、他ならぬテノチティトランとテツココであった。テパネカ戦争でアスカポツァルコを打倒した後、テノチティトランとテツココはトラコパンを迎え入れて新たな三都市同盟を形成した。この三都市同盟こそがいわゆる「アステカ王国」である。その後、スペイン人到来までの1世紀近くの間、今度はテノチティトランが三都市の中で頭角を現し、強大な権力を持つに至っていた。

三都市同盟の支配下に入ることなくテノチティトランのメシーカ人と敵対していたトラスカラの人々は、シコテンカトルとマシスカツィンをはじめとする貴族層の決定により、コルテスへの協力を申し出た。メシーカ人にかつて征服された他の諸都市からも多くの軍勢がコルテス軍に合流した。さらには、テノチティトランの同盟都市であったテツココからもスペイン軍に協力する者たちが現れた。

コルテス到来時のテツココ王はカカマという人物であった。カカマはテノチティトラン王で

あるモテクソマ・ショコヨトル（モクテスマ2世）の甥で、彼の即位にはテノチティトランの意向が多分に反映されていたと考えられている。これに対し、テツココ王家の中には別の候補者もいた。そのうちの一人であるエルナンド・イシュトリルショチトルを中心とするグループは、1521年のテノチティトラン包囲戦においてコルテス軍に尽力したことで知られる。

以上のように、征服戦争時の「インディオ」の実態は一枚岩と形容するには程遠く、この地域の人々が共有する論理の下で各集団が独自の行動をとった。その結果、スペイン軍に加勢して「勝利者」となったインディオもいれば、テノチティトランやトラテロルコのように明らかに「敗者」となったインディオもいた。それゆえ、「敗者＝インディオ」という画一的な見方にこだわり過ぎると、「一枚岩的な先住民」という虚像を増長させることになってしまう。

にもかかわらず、このような実態を伴わない「インディオ」という集団を暗黙の前提として設けることは、征服以降、現代に至るまで長く続けられてきた。現在、メキシコをはじめ多くのラテンアメリカ諸国では、「インディオ」という語は差別的表現に当たるとして使用されていない<sup>10</sup>。だが、実際には、「インディオ」が「インディヘナ（先住民）」という語に置き換えられたに過ぎず、根本的な概念に変化はない。

ヨーロッパ中心史観が批判されてきたここ数十年の歴史研究の成果を踏まえることは重要である。しかし、西欧中心の歴史観の中から生まれてきた用語である「インディオ」の視点という虚像を無批判に受け入れ、ヨーロッパ中心史観に基づいた歴史記述をインディオ中心の歴史記述に置き換えるという無意味な試みは回避せねばならない。西欧中心の観点で語られてきた歴史を、先住民の観点だけから見た歴史に置き換えたところで、自己中心的歴史観で歴史を語ることに何の変わりもないことになってしまう。しかも、その「先住民／インディオ」とは、征服戦争の事例にも見られるように、実体を伴わないものであった。先住民側の視点に立った歴史の再構築が一定程度蓄積されてきた現在、真に必要なのは、そうした「インディオ」を相対化し、その内実を問い直すことだと言える。

### 3. 混血化とメソアメリカ

メキシコや中米の先住民文化を対象として研究を進めていく上で避けて通ることのできない大問題の一つは、征服以前のメソアメリカ文化の一体性と多様性にかかわる議論である。メソアメリカの定義そのものに関しては後述するが、多くのメソアメリカ研究者によって、統一基盤の中の多様性という形容がよくなされてきた。つまり、メキシコから中米にまたがるメソアメリカにおいて数千年にわたって興亡した諸文化には、共通の文化的基盤があり、その上に時代や地域ごとの特性が見られるという考え方である。しかし、実際にその共通基盤についての

議論が正面からなされる機会は少ない。個々の特定の側面を取り上げて研究・比較する場合には、同じメソアメリカ内の異なる地域間でまったく違った様相を示すことも多々ある<sup>11</sup>。

このメソアメリカ文化という観念を再考する上でのヒントの一つは、「インディオの一体性」という虚像の上に成り立つもう一つ概念、すなわち「混血化」であると筆者は考えている。メソアメリカの文化的な多様性と共通性に関する突き詰めた議論が希薄な理由として、一方にはデータの制約という問題があるのも事実である。というのも、後古典期後期のアステカなど一部の先スペイン期文化を除き、文書史料の利用が限られているからである。しかし、他方で、征服後のメキシコや中米諸地域がスペイン植民地（ヌエバ・エスパーニャ副王領）となり、16世紀初頭までの独自の文明発展とはまったく異なる歴史的道筋を歩んだことがその間接的な理由となっていることも無視することはできない。この歴史的経緯の中で西欧人の発明した概念がインディオであったことは上で見た。そうしたインディオなるものの存在を、白人（西欧人）と対置させることで「混血化（メスティサヘ）」という概念が成立している<sup>12</sup>。

征服・植民地化の結果、16世紀以降、アメリカ大陸における混血化の過程は徐々に進んでいった。とりわけ、メキシコの場合、独立後のメスティソ人口の増加は著しく、現在では全人口の9割がメスティソであるとすら言われる。メキシコの公的な歴史において長らく「混血文化」という自己定義がなされてきたことは周知の通りである。

20世紀後半以降、こうした公定史への懐疑的な見解が次第に表明されるようになった。例えば、ボンフィル・バタージャは、混血文化によってやがて先住民文化は消えゆくという20世紀半ばまでのインディオ観に異議を唱え、公式のメキシコからは無視され否定されている先住民的な「深遠なるメキシコ」が存在すると論じた（Bonfil Batalla 1994 [1987]）。しかしながら、こうした議論は大部分が現代メキシコ文化を論じる場合に限られる。独立以前の歴史を見る上での、「先スペイン期＝インディオ文化という均質性」、「植民地時代＝スペイン人（それに伴う黒人）の登場とその帰結としての混血化」というコントラストについては、根本的に省みられていない。

植民地時代史の分野においては、ここ数十年の研究の進展により、「混血化」の問題が生物学的な次元だけに限られるものではないことが指摘されてきた。例えば、16世紀後半から17世紀前半に多く著された「先住民」の歴史書には、ヨーロッパから持ち込まれた諸概念を巧みに操り、著者自身や著者を含む特定の集団の社会的立場の改善や生き残り戦略に直結する記述が残されたり、植民地支配という新たな秩序にあわせてスペイン人到来以前の歴史を再解釈するといった知的活動の展開が見られた（Navarrete Linares 2007; Inoue Okubo 2007）。すなわち、生物学的次元のみならず、血の混ざり具合とは別に文化的な側面においても、様々な度合いで混雑が進んでいったという議論がなされている。

こうした動向の中で、先スペイン期に関しても、近年、ようやく反応が示された。先スペイン期の研究において「混血化」という課題に正面から取り組んだ研究書がメキシコで出版された。フランス人研究者デュヴェルジェが2007年に著した『最初の混血化 *El primer mestizaje*』である (Duverger 2007)。「混血化」という書名を持ちながらも扱っているのは先スペイン期文明という挑戦的な研究書であった。

デュヴェルジェによれば、メソアメリカ的な要素とは、ナワ民族を基盤にしたものであるという。そして、メソアメリカ各地の土着要素がナワ系民族の文化要素を取り入れたり、それと融合することで、メソアメリカ文化の共通基盤が形成されたという新説を唱えている。

この新説に批判が殺到するであろうことは想像に難くない。とりわけ、ナワ系諸民族の分布を半ばア・プリオリに想定している点はその主張の説得力を弱める大きな原因となっており、これが新たな定説として定着していくことはおそくないだろう。しかしながら、先スペイン期の諸文化を「混血化」という用語を用いて捉えたこと自体は評価されるべきであるし、この視点は今後ともさらに掘り下げられていく必要がある。

実際、先スペイン期諸文化の興亡において、「混血化」が重要な役割を果たした事例がいくつか思い当たる。メシーカ人のメキシコ盆地への到来から三都市同盟（「アステカ王国」）成立までの経緯は、彼らの「混血化」の過程を如実に示すものである。

メシーカ人は北方の起源の地アストランで被っていた抑圧を逃れ、長旅の末にメキシコ盆地に到達したとされる。アストランの存在そのものを含め、その移住譚は半ば伝説的である<sup>13</sup>。しかし、その旅のストーリーには、メシーカ人が最終的に辿りついたメキシコ盆地やその周辺部に共通の概念が巧みに織り込まれている。

そもそも起源の地から変容を伴う旅を経て現在の居住地に至るという筋書きそのものが、既存のメキシコ中央部の諸集団の間に存在した概念であった。また、旅の途中で彼らが通過したとされるチコモストクという地は、同じく先住のナワ系諸民族の間で共有されていた神話的場所、チチメカ（粗野で野蛮な生活形態）からトルテカ（ナワトル語を話す文明的な生活）への変容の場所であった。

メキシコ盆地到着後、やがてメシーカ人は1325年（もしくは1345年）にテノチティトランの町を建設する。しかしこの町を建設しただけでは、周囲の先住者の諸都市から1つの都市（アルテペトル）とは認められなかった。この時にもメシーカ人は既存伝統を受け入れ、周囲から認知されているクルワカン王家の人物をテノチティトランの王（トラトアニ）として迎え入れている。さらに、1428年のテパネカ戦争を経て覇権を握る過程においても、エシュカン・トラトロヤン（三都市同盟）という、既存の政治体制に則って、自らの覇権を確立していった。つまり、スペイン人征服者たちが目の当たりにした「アステカ王国」を建設するまでにメ



シーカ人が数世紀間かけて行なってきたことは、絶え間ざる文化変容の過程であり、地元文化への適応の過程であった。

この例からもわかるように、メシーカ人は既存文化との共生を図り、その土俵の上ではじめて力を伸ばしていった。換言すれば、現代研究者がメソアメリカ的と呼ぶものは、はじめからすべての人々に確固として備わっていたわけではなかった。それは、きわめて歴史性の高いもので、デュヴェルジェの言う「混血化」の結果であった。時に武力などによる激しい衝突も伴いながら、異なる集団同士が交流を繰り返して、文化面での共生を図ってきたと言えるだろう。メシーカ人が既存伝統としての移住譚を取り入れて自らの起源を語るストーリーを作り上げ、既存の政治体制に則って力を伸ばしていった経緯は、文化的共生の上に築き上げられた権力の確立に他ならなかった。古典期に諸都市が繁栄し、時に激しい抗争を繰り返しながらも、「マヤ王国」のような統一王朝が生まれなかったのも、テオティワカンが多民族都市として隆盛を誇ったのも、このような「混血の思想」に一因があったのではないだろうか。

これまで、先スペイン期は「純粋な」固有の文化・文明が育まれた時期で、混血化は植民地化以降の問題であると考えられてきた。だが、先スペイン期においても、おそらく世界の他地域でもそうであったのと同じように、文化面での絶え間ざる混濁が存在した。こうして他者の文化要素を取り込みながら、固有の文化を築き上げていく現象は500年を経た今なお続いている。「混血化」の用語の適否はこれからの議論に委ねられるが、先スペイン期先住民文化に暗黙の一体性を想定することから逃れるための議論のきっかけになると言えるだろう。

#### 4. 環境とメソアメリカ

上で見たように、征服前のメソアメリカの人々は対立の中で文化的共生を築こうとしてきた。こうした共生の態度は、他の人間集団を前にした場合だけでなく、自然環境と対峙した場合にも同様だったであろう。そうだとすれば、他集団（人間）との共生と並んで、周囲の自然条件（環境）との共生は、メソアメリカの文化的特徴が形成されていく上できわめて重要な役割を担ったと言える。それゆえ、メソアメリカの文化的共生を考える際、これらからの研究で鍵になると思われるテーマの一つとして、環境史が挙げられる。

ヒュージによれば、現在の環境史研究はおもに以下の3つの大きなカテゴリーに関わるもので、多くの研究者がこれらのカテゴリーのうちの1つか2つに力点を置いている (Hugh 2006: 3)。

- 1) 人間の歴史に対する環境要因の影響。
- 2) 人間の行為による環境の変化、ならびに人為的な環境変化が人間社会の変化の道筋に影響し影響する様々なあり方。

3) 環境に関する人間の思考の歴史、および人間の態度のパターンが環境に影響を及ぼす行為を引き起こす様子。

この動向からもわかるように、環境史研究は必ずしも自然環境そのものの変遷だけを扱っているわけではない。むしろ、人間と環境の關係に重きが置かれている。しかも、メソアメリカ文化はきわめて多様な自然環境を有する地域に広がっており、近年、英語圏を中心に広がりを見せてきた環境史研究のフィールドとして今後の研究の進展が待たれる地域でもある<sup>14</sup>。

日本においても、自然や風土を歴史学から切り離してきたことへの批判が出され、モンソーンアジアの自然環境で育まれてきた文化を西欧の文化観・文明観に準えるのではなく、それぞれ独自のものとして比較していく必要が唱えられている（安田 2004: 11-99）。メソアメリカ文明もこれと同様の文脈で論じられる可能性がある」と筆者は考える。メソアメリカに関して、環境史という枠組での研究は非常に少数である。だが、世界観や宗教に関する研究の蓄積があり、これらに結びつく形で議論を進めていくことは可能であろう。

人間と自然の關係は、メソアメリカにおいては対立的というよりは相互補完的である。際立った特徴として、メソアメリカの人々の思考における二元性の重要性が指摘されてきた。例えば、太陽と月、生と死、乾燥と湿潤といった対立的概念は、排他的なものではなく、相互補完的なものであった（表1）。同じように、人間が生きている世界（現世）と並行して、これと照応する神的世界が存在し、現世は神の世界の縮図であると考えられていた（ロペス・アウスティン 2001: 83-85）。

表1：メソアメリカの宇宙観における対立・補完的概念の例

父	母	生	死
男性	女性	花	火打石
熱さ	冷たさ	火	風
太陽	月	立腹	鋭い痛み
上	下	発火	衰弱
鷲	ジャガー	年長	年少
13	9	芳香	悪臭
天界	地下世界	栄光	性欲
乾燥	湿潤	貧しさ	豊かさ
光	闇	東	西
強さ	弱さ	南	北
昼	夜	高い	低い
燃焼	水		

出典：López Austin y Millones 2008: 36.

無論、自然環境は不変ではない。時に人間によって手が加えられたり、人間生活の影響を受けることで変化したりして、それが新たな自然環境となる場合もある。環境との相互關係の中



図4： 湖上都市テノチティトラン（コバルビアス画）

（小林貴徳氏撮影）

で独自の自然観が形成され、そういった自然観が宗教や世界観、さらには現実の生活を規定する様々な習慣や思考にまで影響を及ぼしていったであろうことは、想像に難くない。

そうした結果、自然との共生、つまりは環境と世界観の一致という現象が起こる。後古典期後期、テノチティトラン定住後のメシーカ人がテツココ湖で行なった様々な水利事業は、現実的な諸問題と彼らの宗教観・世界観がうまく組み合わせられた例である。

メシーカ人が定住したテツココ湖中の島（メシコ）は、様々な不利な条件を抱えていた。テノチティトランを建設する際の資材も近隣での入手が難しく、耕作をしようにも湖水には塩分が含まれていた上、飲料水の確保も容易ではなかった。彼ら自身が語るところでは、守護神ウィツィロポチトリの神託によって選ばれた場所であったが、現実には、14世紀前半のメキシコ盆地の政治情勢に規定される形でここに住むようになったと考えられる。

上述のように、15世紀前半、覇権都市アスカポツアルコを戦争で破ったテノチティトランのメシーカ人は、テツココおよびトラコパンと三都市同盟を形成した。覇権を確立した後、メシーカ人はテツココ王ネサワルコヨトルの力を借りながらテノチティトラン周辺の水利事業を展開した。陸地のチャプルテペクから水道を引いて十分な飲料水の確保に努めるとともに、テツココ湖中に大規模な堤防を建造してテノチティトラン周辺の塩分濃度を下げ、チナンパ耕作を可能にしようとした（井上 2007: 74-76）。

こうした自然環境とメシーカ人によるその改変は、彼らの中で宗教的にも位置づけられた。チャプルテペク水道の開通は、同時に「水の女神」がテノチティトランへ来ることであった。大堤防を設けたテツココ湖は、単に克服すべき自然というわけではなく、畏怖すべき対象でもあった。テツココ湖中のパンティトランで行なわれていた儀礼はその一例である（井上 2007: 76-79）。

ミラーは「アステカ人はユニークな湖環境で栄えた帝国を作り上げたが、それは自然の調和に基づいたものではなく、自然の活用に基づいたものであった」と述べている (Miller 2007: 23)。現実面だけを見れば、この結論に誤りがあるとは言えない。しかしながら、思想面で自然との調和のバランスを図っていた点を見逃すことで、彼らの自然観を無視してしまつては、人間と環境の相互関係を見る上では片手落ちとなる。

メソアメリカの人々が環境をいかに捉え、利用や改変をし、独自の自然観を形成することで自然環境との共生をどのように試みてきたのかという具体的事例の研究は、資史料の制約もあり、必ずしも多くはない。だが、植民地時代や独立以降の事例も対象としながら、メソアメリカの人々と自然との関わりが今後より明らかになっていく可能性はある。地道な個別事例の研究成果を積み重ねながら、環境と人間の相互関係を考察することで、メソアメリカ内での相違や共通点の議論はもちろん、西欧やアジアなど世界の他地域との比較も視野に入れることが可能になるだろう。

## 5. 新たなメソアメリカ文明像に向けて

メソアメリカは大きく6つの地域に分けられる (図5)。西部は現在のメキシコ合衆国のシナロア、ナヤリー、ハリスコ、コリマ、ミチョアカン、ゲレロ各州にまたがる地域である。北部はドゥランゴ、サカテカス、サン・ルイス・ポトシー、タマウリパス、ハリスコ、アグアスカリエンテス、グアナフアト、ケレタロの各州を含む。この北部地域は気候変動により農耕民が南下したため後古典期にはメソアメリカに含まれなくなつたとされる。メキシコ中央部は、イダルゴ、メキシコ、トラスカラ、モレロス、プエブラの各州と連邦区にまたがる。オアハカ地域は、現在のオアハカ州に加え、ゲレロ、プエブラ、ベラクルス州の一部も含む。湾岸地域は、タマウリパス、サン・ルイス・ポトシー、イダルゴ、ベラクルス、プエブラ、タバスコ各州にまたがっている。最後に、南東部はメキシコ合衆国のタバスコ、チアパス、カンペチェ、ユカタン、キンタナ・ロー各州に加え、グアテマラ全域、ベリーズ全域、エルサルバドル全域、およびホンジュラス西半分、ニカラグアとコスタリカの一部を含む。南東部は概ねマヤ文化が栄えた地域に該当し、マヤ研究者の間ではこの地域をさらに3つに分けて北から順に、マヤ低地北部、マヤ低地南部、マヤ高地と呼ばれる (青山 2005: 11-15)。

これらメソアメリカ各地の自然環境は非常に多様である。下位地域区分一つを取り上げても、南東部がとりわけそうであるように、その中の地形・植生・気候は大きく異なる。メキシコ中央部には標高 2,000m を超える高原地帯が広がるのに対し、メキシコ湾岸から南東部のマヤ低地南部にかけては熱帯雨林が広がる。年間の降水量が 1,000mm を下回るころもあれば、

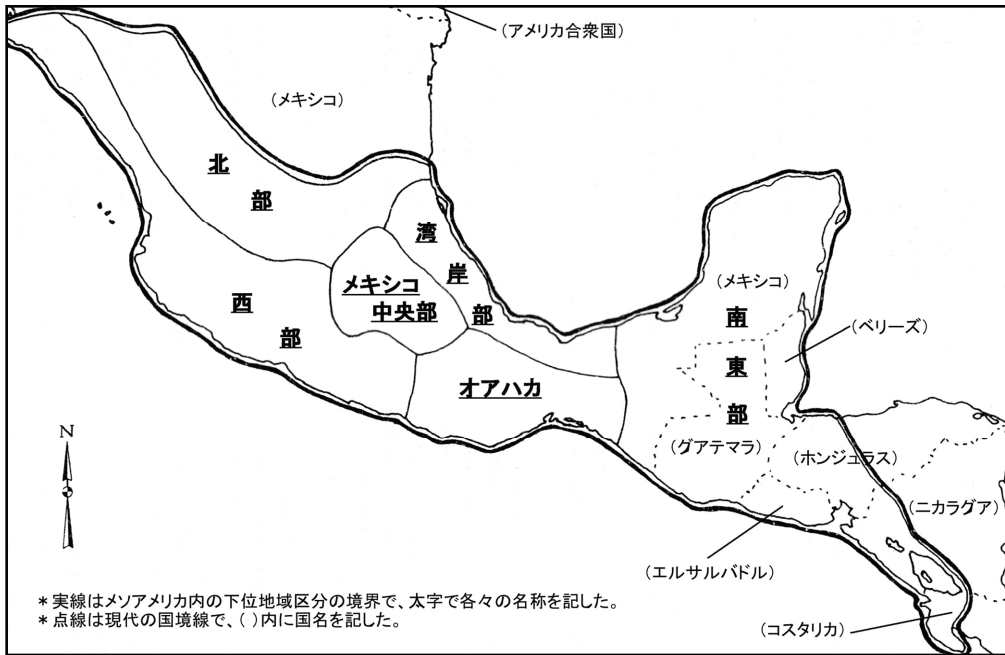


図5：メソアメリカの範囲と下位地域区分

出典：López Austin y López Luján 1996, p. 68 を修正・改変。

3,500mm に上る場所もある。また、言語学的に見ても、メソアメリカは多様性を内包しており、16 の語族に属する多数の言語集団が存在していた。現代メキシコだけを見ても、言語の定義の仕方次第で正確な数値は変わるにせよ、70 近い数の先住民言語が存在している<sup>15</sup>。

メソアメリカという文化領域概念が定着したのは、1940 年代以降のことである<sup>16</sup>。メキシコで活躍していたドイツ人研究者キルヒホフが文化領域としてのメソアメリカ概念を提案し、その後論文として発表したものが下敷きとなっている。キルヒホフへの反論も含め議論が重ねられてきたものの、基本的に現在までこの概念は有効なものとして用いられ続けられている<sup>17</sup>。

キルヒホフが提案したメソアメリカとは、16 世紀前半、スペイン人が到来した時点をも想定したもので、表 2 (次頁) の特徴を備えていた。

多様な人間集団と自然環境という条件の下で、メソアメリカの物質的要素は確かに驚くべき共通性を見せているが、個々の要素が必ずしもすべての地域や時代に見られるわけではない。実際、キルヒホフ自身が想定したのは 16 世紀前半、スペイン人に征服される時点での物質的要素であり、3000 年以上も遡って、例えばチナンパのような要素が各地に見られる訳でないのは明白である。

この問題に正面から取り組んだ研究者の一人、リトバク・キングは、諸地域間の交流がメソ

表 2 : キルヒホフによるメソアメリカの文化要素

メソアメリカに固有の要素	アメリカ大陸他地域にも見られる要素*	メソアメリカに欠けている特徴的要素*
コア（掘り棒）、チナンパ（湖上の畑） チア栽培（飲料等に使用） 竜舌蘭栽培（紙やブルケ等に使用） 石灰を用いたトウモロコシ製粉 土器製吹き矢筒、土器製ベソーテ（唇飾り） 黒曜石研磨、黄鉄鉱製鏡、銅製穴あけ器 兎毛による織物飾り 黒曜石・火打石つき棍棒 木綿製胴着、把手つき桶、頭巾 ヒールつきサンダル、繫ぎ戦闘服 階段式ピラミッド、化粧しつくい リングつき球戯場 絵文字、数詞絵符・位取り 折本（屏風型絵文書）、歴史書、地図 365 日暦（20 日×18 ヶ月+5 日） 260 日暦（20 の記号×13 の数字） 二種の暦の組合せ（52 年周期） 期間終末ごとの祭り 吉日・凶日、誕生日による命名 紙とゴムの儀礼的使用 ウズラ犠牲、人身犠牲（火焙り、皮を被った舞踊）、自己犠牲（舌や性器などから瀉血） ボラドール、聖数 13、共通の神々 彼の世の概念と苦難の旅 親族の死者の先浄水飲用 専門化した市場、諜報活動もする商人 兵士の位階（鷲・ジャガーの戦士） 犠牲確保のための戦闘	農耕、陶器（SE, SW, CH, AD, AZ） トウモロコシ・フリホル豆・瓢箪類の栽培（SE, SW, CH, AD, AZ 北西部） 人身犠牲（SE, CH, AD） ジャガイモ栽培、吹き矢、戦勝品としての人間の頭部（SE, CH, AD, AZ 北西部） 食人（SE, CH, AZ） 告解（SE, AD, AZ 北西部） 人手による耕作、石や土の建造物、サンダル（SW, CH, AD） 綿花栽培（SW, CH, AD, AZ 北西部） 段々畑、吊り橋、ヒョウタン製筏（CH, AD） マニオク・チリトウガラシ・パイナップル・アボカド・パパイヤ・スモモ類の栽培、無毛食用犬・鴨、編んだ桶・長槍、金属加工、石畳道、市場（CH, AD, AZ 北西部） 氏族、人間の心臓摘出、神殿への犠牲の血塗布（AD） 編みうちわ、コマル、手を使わないゴム球戯、ばちで打つ木太鼓（AZ） 地下式の窯、蒸気風呂（上記以外の非定住狩猟採集民と共通）	耳たぶ装飾（SE, CH） 母系氏族（SE, SW, CH, AZ 北西部） 親族の死者の骨粉飲用（SE, SW 狩猟採集民, CH, AZ 北西部） 毒を塗った武器（SW, CH, AZ） コカ栽培（CH, AD） 椰子栽培（CH, AD, AZ）

\*カッコ内はその要素が見られるメソアメリカ以外の文化領域の略称。SE…北米南東部、SW…同南西部、CH…チブチャ（コスタリカ〜コロンビアにかけての「中間領域」）、AD…アンデス、AZ…アマゾン熱帯雨林地域

出典：Kirchhoff 1992: 36-44. 訳語の一部は、小林（1995: 8）に準じた。

アメリカを形成した重要な要素であると説く。彼によれば、そうした相互交流が行なわれる中で、民族間の文化的な交流も進み、メソアメリカと呼びうる文化領域が形成されていった（Litvak King 1992 [1975] : 85-91）。

これに対し、メソアメリカの範囲を考察したオチョアらは、古典期のメソアメリカは後古典期に比べてはるかに限られたものであるとの見解を述べている。さらに、先古典期に関しては、文化領域という概念を当てはめるのは誤りであって、その先駆けとなる地域が個別的に存在していたに過ぎないと主張する（図 6 ; Ochoa, Ortiz-Díaz y Gutiérrez 1999: 96-97）<sup>18</sup>。いつメソアメリカが文化領域として確立されたかという点では一致していないものの、先古典期に点在していた文化が交流を経てやがてメソアメリカとしての一体性を持っていくという点では、上述のリトバク・キングの議論と軌を一にするものである。

以上の説を考慮すると、メソアメリカの文化的特徴は特定の 1 ヶ所から拡大したというより

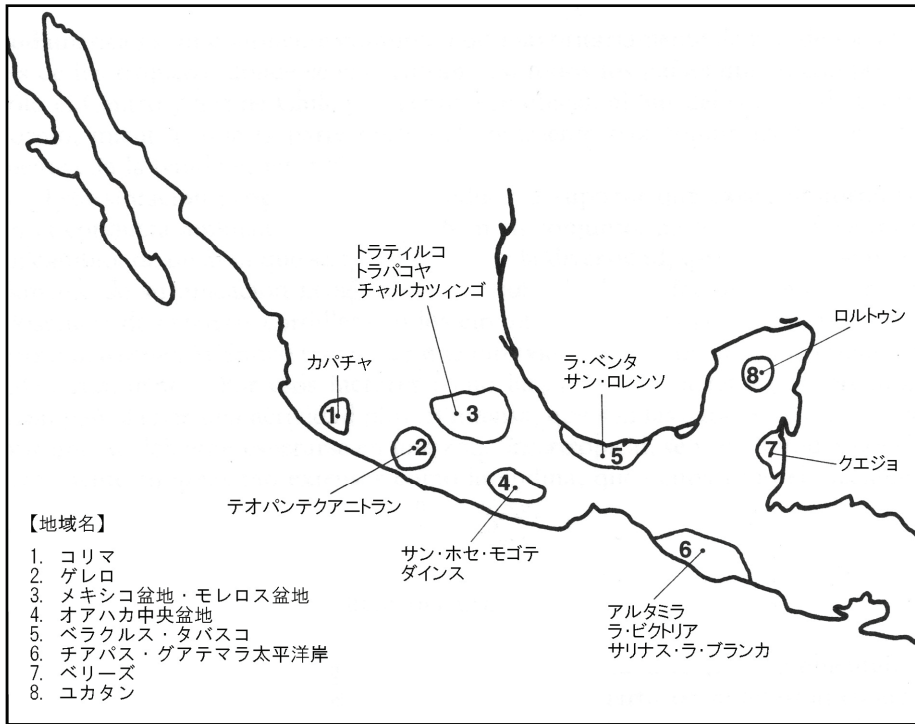


図6： 先古典期のメソアメリカ

出典：Ochoa, Ortiz-Díaz y Gutiérrez 1999: 97 を修正・改変。

も、「混じり合い」の中で生成され、異なる民族の交流を通じて広がっていったと考えられる。当然ながら、各時代の特定の場所では激しい文化的対立や武力衝突もあったであろうし、実際、テオティワカンや古典期マヤの諸都市の衰退・破壊の原因として多民族や他集団との衝突も唱えられてきた。

キルヒホフの一覧で挙げられた文化要素の中には物質的制約を受けるものも多い。とはいえ、「交流」によって確かにモノも移動するが、概念や思考も同様に移動することに留意する必要がある<sup>19</sup>。メソアメリカの特徴の核心はむしろ思想や世界の捉え方（宇宙観・宗教観）にあると考える方が理に適っているように筆者には思われる。すなわち、キルヒホフの一覧のうち、チナンパをはじめ様々な道具やその材質といった物質的要素は、「交流」の副次的産物であって、必ずしもメソアメリカ全域に存在しなくてもよい。逆に、暦や宗教儀礼といった実践は、メソアメリカ的「思考」のより直接的な顕れであり、地域によって形が変わることがあっても、その背景にある思考には共通性があると言えるのではないか。

メキシコの歴史家ロペス・アウスティンは、メソアメリカの多民族の共生を可能にした信仰

と実践を「硬い核 *núcleo duro*」と呼び、ブローデルの「長期持続」の概念を援用しながらこれを説明している (López Austin 2001: 58-62)。そうして培われたメソアメリカ的思考は、これら地域の諸民族の大きな特徴である「適応力」を生み出し、ヨーロッパ人による征服から現代まで5世紀に亘る存続を可能にした。

メソアメリカの特性を考える際、キルヒホフはもちろん、以後のほとんどの研究者が先スペイン期のみを想定してきた。確かに、植民地支配や近代化の波の中で、メソアメリカの人々は大きく変容し、表面だけを見るとまったく変わってしまったかのように見える部分もある。だが、20世紀以降の数多くの民族誌とその分析から、スペイン人による征服以降、メソアメリカ的思考が全面的に止まってしまったわけではないことは明白である。つまるところ、植民地時代から現代までをも視野に入れてメソアメリカを論じる必要がある。しかしながら、現実には16世紀前半の特定の時期だけを想定したキルヒホフのメソアメリカの定義を我々は過信しすぎ、本来キルヒホフが望んでいたその先の議論を必ずしも十分にはしてこなかった。

通常、メソアメリカと言えば、先スペイン期のみをイメージすることが多い。しかし、実際にはメソアメリカの様々な文化的要素はその後の植民地時代、さらには現代まで受け継がれてきている。青山の言葉を借りれば、「現代メソアメリカの文化は、過去の文化や歴史の総和であり […] 現在進行形の生きている文化である」(青山 2007: 247)。

先スペイン期を考える際、後古典期後期のみを想定した説明を無批判に前提としてしまっただけではならぬ。数百年単位の時間差、時には1000~2000年以上もの時間差が存在する場合の安直な比較や引用には注意が必要であろう。これに加えて、先スペイン期のみを見据えた狭いメソアメリカ観ではなく、スペイン人との接触以降の500年の歴史も見据える必要がある。征服から現代に至るまでの状況を視野に入れた上でメソアメリカの文化伝統を見直す時期に来ているのではないだろうか。その見直しを行なうにあたって、「混血化」と「環境」は新たな議論の入口として重要な論点になると筆者は確信している。

## おわりに

メソアメリカは、16世紀以降、西欧中心の世界に包摂され、人類史上比類なき文化的接触が生じた地域である。しかし、このような特異性ゆえに、元来そこに住んでいた住民の多様性はしばしば無視され、暗黙のうちに「一体性」が想定されてきた。本稿ではこの点を論じた後、「混血化」と「環境」が新たなメソアメリカ論の入口となることを示唆し、メソアメリカ概念にかかわる問題を小考した。

メソアメリカは征服をもって終焉を迎えると考えられがちである。だが、テオティワカンが



衰退し、マヤ諸都市の繁栄が途絶え、「アステカ王国」が外来者に征服されてもなお、これらの文明の遺産は現代のメキシコや中米の生活の様々な場面に深く根づいている。キリスト教の形式に則った「雨乞い儀礼」や、民間療法に残存する病気の捉え方といった民族誌的側面ばかりか、トウモロコシを主食とし、日々トルティーリヤを食す文化は続いている。つまり、メソアメリカは過去と断絶した文明ではない。政治的・制度的には存在しないが、その実態は現代社会の随所に今も深く根を張っている。

無論、数百年といった時間差を飛び越えての単純な比較からメソアメリカの継続性を主張するような拙速な議論は避けなければならない。それゆえ、先スペイン期研究では先古典期・古典期・後古典期の時間的隔たりというものを常に念頭に置かねばならないであろう。同じように、植民地時代と独立以後の国家形成期の研究、さらには現代の人々に関する研究を慎重に結び付けていながら、メソアメリカらしさとは何なのかをあらためて考える時期に来ている。

グローバル化の名の下に欧米化が進む 21 世紀の現代世界において、我々は、日常的な異文化接触、さらに大局的には地球環境とどう向き合うかを模索する必要に迫られている。最初の提案から 70 年ほどが経過した現在、メソアメリカを特徴づけているものとは何であるのかを再考し、表面的には形を変えながらも深層において何らかの形で継続してきたであろうメソアメリカ的思考の実像を解き明かす作業は、現代社会にも重要な示唆を与えてくれることであろう。

\*本稿は、文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（代表：青山和夫）、研究項目 A02「メソアメリカ文明の盛衰と環境の通時的研究」（代表：青山和夫、課題番号 21101003）の助成を受けた研究成果の一部である。

## 注

<sup>1</sup> 本年（2010年）は、独立運動の端緒となったミゲル・イダルゴ蜂起の年（1810年）とメキシコ革命勃発（1910年）から、それぞれ200年、100年に当たる。

<sup>2</sup> 日本とメキシコ（当時はスペイン支配下のヌエバ・エスパーニャ副王領）の交流は、1609年にロドリゴ・デ・ビベロが上総国岩和田に漂着し、翌1610年、徳川家康の援助によって使節とともにメキシコへ帰港したという出来事に遡る。

<sup>3</sup> 大航海時代のスペインのイデオロギーについては、染田（1992）、先住民側の反論と抵抗については、中米の人びとと手をつなぐ会（1992）を参照されたい。

<sup>4</sup> 1991年にバルセロナの造船所で復元されたサンタ・マリア号はスペインを出航し、大西洋と太平洋の航海を経て、翌1992年に日本に到着した。現在も神戸港（メリケンパーク内の神戸海洋博物館）で屋外展示されている。

<sup>5</sup> 本論の後半で詳しく見るように、メソアメリカとは、メキシコから現在の中米諸国にまたがる文化領域を指す名称で、オルメカ、マヤ、サポテカ、ミシュテカ、テオティワカン、トルテカ、アステカ、タラスカなどの諸文化が数千年にわたって興亡した。

<sup>6</sup> メソコ征服戦争とは、エルナン・コルテス率いるスペイン人征服者らが「アステカ王国」を征服した1519年から1521年にかけての2年余りの歴史的経緯を言う。

- <sup>7</sup> 具体例としては、ボドとトドロフ (1994) やシュワルツ (Schwartz 2000) のアンソロジーがある。
- <sup>8</sup> スペイン語では、「インディオス・アミーゴス (友好的インディオたち)」とも呼ばれる。
- <sup>9</sup> ナワトル語でアルテペトル (altépetl) とは、本来は「水・山」を意味し、都市や町村を指す表現である。通常、アルテペトルは独自のトラトアニ (「王」) を有するいわば都市国家であった。
- <sup>10</sup> ただし現在先住民の中には意図的にこの表現を用いる人々もある。
- <sup>11</sup> マヤ研究者が「メキシコでは〇〇だが、マヤでは××である」という語り方をする場合がその典型例の一つである。この場合の「メキシコ」とは、主にメキシコ中央高原 (テオティワカンやアステカなど) を念頭に置いた表現である。
- <sup>12</sup> メスティソ mestizo はラテン語の mixtus に由来し、狭義には白人とインディオの混血者を指すが、より広く混血者全般を指すのにも用いられる。メスティサへはその行為を表す名詞で「混血すること」を意味する。以下の本文で論じるように、現在では、メスティソ、メスティサへともに文化的な混濁を指すのにも用いられる。
- <sup>13</sup> メシカ移住史の解釈については、「神話的解釈」と「歴史的解釈」というそれぞれの立場に立つ研究者がおり、何十年も議論が重ねられてきている (Navarrete Linares 1999; 井上 2001a: 119-120)。
- <sup>14</sup> ラテンアメリカの環境史に関する先駆的仕事としては、ミラーの研究書 (Miller 2007) がある。
- <sup>15</sup> メキシコの国立先住民言語研究所 (INALI) の調べでは、11 語族 68 言語 (方言を除く) が存在する。  
<http://www.inali.gob.mx/catalogo2007/> (2010 年 8 月 30 日参照)
- <sup>16</sup> 当時までに、クラーク・ウィスラーやアルフレッド・クローバーらの人類学者によって、「文化的ホライズン (cultural horizon)」、「文化領域 (culture area)」、「文化形状 (cultural configuration)」、「文化複合体 (cultural complex)」といった諸概念が提示される一方、「メキシコ・中米 (Mexico and Central America)」、「中部アメリカ (Middle America)」、「中間アメリカ (América Media)」などこの地域を指す呼称についても議論がなされていた。「メソアメリカ」という用語を最初に使ったのは、地理学者・民族学者のホルヘ・ビボーである (López Austin y López Luján 1996: 55; 小林 1995: 3)。
- <sup>17</sup> 1939 年の第 27 回アメリカニスト国際会議をきっかけとして組織された「アメリカ大陸文化分布研究国際委員会」の調査成果として 1943 年にキルヒホフの論文が発表された (López Austin y López Luján 1996: 55-59)。
- <sup>18</sup> とはいえ、伊藤 (2010: 34-35, 240) が指摘するように、先古典期メソアメリカについては調査が行なわれている場所や調査範囲に偏りがあるため、図 6 はあくまでも現時点までのデータに基づくものであるということを認識しておかねばならない。
- <sup>19</sup> 遠く離れた二つの都市遺跡、トゥーラとチチェン・イツァの類似点に関する議論を出発点として、終末古典期から後古典期にかけての「スヌア思想」のメソアメリカ各地への広がりを仮説として提示したロペス・アウスティンとロペス・ルハンの議論も、この文脈で理解されるだろう (López Austin y López Luján 1999; 井上 2001b)。

## 参考文献

- (和文)
- 青山和夫 (2005) 『古代マヤ 石器の都市文明』 京都大学学術出版会。
- (2007) 『古代メソアメリカ文明 —マヤ・テオティワカン・アステカ』 講談社選書メチエ。
- 伊藤伸幸 (2010) 『メソアメリカ先古典期文化の研究』 溪水社。
- 池谷和信編 (2009) 『地球環境史からの問い —ヒトと自然の共生とは何か』 岩波書店。
- 井上幸孝 (2001a) 「メシカ移住史の成立過程 —アステカ期の〈發明〉と植民地時代の史料編纂」、『アメリカス研究』第 6 号、天理大学アメリカス学会、107~125 頁。

- (2001b) 「書評 Alfredo López Austin y Leonardo López Luján, *Mito y realidad de Zuyúá*」、  
『古代アメリカ』、第4号、111～114頁。
- (2007) 「アステカ社会における環境利用と自然観 —湖の開発、水と山の儀礼—」、坂  
井正人・鈴木紀・松本栄次編『ラテンアメリカ (朝倉世界地理講座—大地と人間の物  
語—14)』、71～80頁。
- (2008) 「メキシコ史における先住民概念についての一考察 —征服と植民地時代の事  
例から—」、『専修人文論集』、第83号、81～107頁。
- オゴルマン, エドモンド (1999) 『アメリカは発明された —イメージとしての1492年』 青木  
芳夫訳、日本経済評論社。
- 小林致広 (1995) 「接触期メソアメリカの先住民社会」、小林致広編『メソアメリカ世界』、世界  
思想社、1～23頁。
- 染田秀藤 (1992) 「『発見と征服』のイデオロギー —500年の時を超えて」、『歴史評論』、501  
号、2～18頁。
- 中米の人びとと手をつなぐ会編訳 (1992) 『「コロンブス」と闘い続ける人々 —インディオ・  
黒人・民衆の抵抗の五百年』 大村書店。
- ボド, ジョルジュ、ツヴェタン・トドロフ (1994) 『アステカ帝国滅亡記 —インディオによる  
物語』 菊池良夫・大谷尚文訳、法政大学出版局。
- 安田喜憲 (2004) 『文明の環境史観』 中公叢書。
- レオン＝ポルティエヤ, ミゲル 編 (1994) 『インディオの挽歌 —アステカから見たメキシコ  
征服史』 山崎眞次訳、成文堂。
- ロペス・アウスティン, アルフレド (2001) 「メソアメリカの宇宙観 (1)」、岩崎賢・井上幸孝  
訳、『イペロアメリカ研究』、第XXIII巻第1号、75～94頁。

(欧文)

- Bonfil Batalla, Guillermo (1972), “El concepto de indio en América: una categoría de la situación  
colonial”, *Anales de Antropología*, vol. IX, pp. 105-124.
- (1994 [1987]), *México profundo. Una civilización negada*. México, Grijalbo.
- Duverger, Christian (2007), *El primer mestizaje. La clave para entender el pasado mesoamericano*.  
México, Taurus.
- Escalante Gonzalbo, Pablo (2002), “Primer espejo”, en *Espejo mexicano*, Enrique Florescano (coord.),  
México, CMCA/Fundación Miguel Alemán/FCE, pp. 48-71.
- Hughes, J. Donald (2006), *What Is Environmental History?* Cambridge, Polity Press.

- Inoue Okubo, Yukitaka (2007), “*Crónicas indígenas: una reconsideración sobre la historiografía novohispana temprana*”, en *Indios mestizos y españoles. Interculturalidad e historiografía en la Nueva España*, Danna Levin y Federico Navarrete (coords.), México, UAM-Azcapotzalco/UNAM, pp. 55-96.
- Kirchhoff, Paul (1992 [1967]), “Mesoamérica”, en *Una definición de Mesoamérica*, México, UNAM, pp. 28-45.
- León-Portilla, Miguel (1992 [1964]), *El reverso de la conquista. Relaciones aztecas, mayas e incas*. México, Joaquín Mortiz.
- Litvak King, Jaime (1992 [1975]), “En torno al problema de la definición de Mesoamérica”, en *Una definición de Mesoamérica*, México, UNAM, pp. 74-104.
- López Austin, Alfredo (1999), *Breve historia de la tradición religiosa mesoamericana*. México, UNAM.
- (2001), “El núcleo duro, la cosmovisión y la tradición mesoamericana”, en *Cosmovisión, ritual e identidad de los pueblos indígenas de México*, Johanna Broda y Félix Báez-Jorge (coords.), México, CONACULTA / FCE, pp. 47-65.
- López Austin, Alfredo y Leonardo López Luján (1996), *El pasado indígena*, México, FCE.
- (1999), *Mito y realidad de Zuyuá. Serpiente Emplumada y las transformaciones mesoamericanas del Clásico al Posclásico*. México, El Colegio de México/FCE.
- López Austin, Alfredo y Luis Millones (2008), *Dioses del Norte, dioses del Sur. Religiones y cosmovisión en Mesoamérica y los Andes*. México, Era.
- Miller, Shawn William (2007), *An Environmental History of Latin America*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Navarrete Linares, Federico (1999), “Las fuentes indígenas más allá de la dicotomía entre historia y mito”, *Estudios de Cultura Náhuatl*, vol. 30, pp. 231-256.
- (2007), “Chimalpain y Alva Ixtlilxóchitl, dos estrategias de traducción cultural”, en *Indios mestizos y españoles. Interculturalidad e historiografía en la Nueva España*, Danna Levin y Federico Navarrete (coords.), México: UAM-Azcapotzalco/UNAM, 2007, pp. 97-112.
- Ochoa, Lorenzo, Edith Ortiz-Díaz y Gerardo Gutiérrez (1999), “Diversidad geográfica y unidad cultural de Mesoamérica”, en *Historia general de América Latina I: Las sociedades originarias*, Teresa Rojas Rabiela y John V. Murra (eds.), UNESCO / Trotta, pp. 69-97.
- Romero Galván, José Rubén, coord. (2003), *Historiografía mexicana I: Historiografía novohispana de tradición indígena*. México, UNAM.
- Schroeder, Susan (2007), “Introduction: The Genre of Conquest Studies”, in Laura E. Matthew and

- Michel R. Oudijk (eds.), *Indian Conquistadores: Indigenous Allies in the Conquest of Mesoamerica*, Norman, University of Oklahoma Press, pp. 5-27.
- Schwartz, Stuart B. (2000), *Victors and Vanquished: Spanish and Nahua Views of the Conquest of Mexico*. Boston, Bedford/St. Martin's.
- Vivó, Jorge A. (1992 [1935]), "Rasgos fundamentales y correlaciones culturales de Mesoamérica", en *Una definición de Mesoamérica*, México, UNAM, pp. 15-21.